

ふじのみや探検

第26号

するがはんし
駿河半紙のひみつ



発行：富士宮市立中央図書館 〒418-0067 静岡県富士宮市宮町13-1 TEL:0544-26-5062 FAX:0544-26-1284

ひみつ1

駿河半紙ってなに？

江戸時代の中ごろから、駿河国ではミツマタの木の皮を原料にした紙漉き(紙づくり)が盛んになりました。この紙はしなやかで墨つきがよく、書道用紙や木版用紙として庶民にも広く用いられ、江戸の町へたくさん出荷されるようになりました。そこで、駿河国の紙は駿河ものとか駿河半紙と呼ばれました。

駿河半紙の産地として、主に興津川流域や芝川流域が知られていますが、富士郡原村(現富士宮市原)では、渡辺兵左衛門定賢が、ミツマタを原料にした紙を漉きはじめ、村をあげて生産に取り組みました。また、近くの村々にも広がり、駿河半紙の産地となりました。

明治時代になって、渡辺定賢の子孫である渡辺登三郎は、駿河半紙の発展のために、ミツマタ栽培や植林事業を進めました。また、製紙工場の設立にもかわり、郷土の発展に尽くしました。



紙漉きのようす

◇ことばの説明



駿河国…昔の国名の呼び名。現在の静岡市、富士宮市、富士市、沼津市、裾野市、御殿場市などが含まれます。

ミツマタ(三桠)ってどんな木？

ミツマタは、3月から4月ごろにかけて、三つ叉にわかれた枝の先に黄色い花を咲かせます。枝わかれている部分は、必ず3つにわかれているのでこの名前がつけられたようです。



ミツマタの木の皮の繊維は、細く強いのが特徴です。また、種を取ったり挿し木をしたりして増やすことができ、栽培することができます。

紙の原料として、古来より雁皮、楮の植物が使われてきましたが、楮だけでなくミツマタも栽培することで、紙の生産量が増えました。ミツマタは、雁皮、楮とともに、和紙の三大原料の一つです。



がんに
雁皮

こうぞ
楮



ひみつ2

ミツマタ栽培

駿河半紙の生産が増えるにつれ、原料であるミツマタの栽培も盛んになり、駿河国だけでなく全国に広がっていきました。明治時代になり、ミツマタが紙幣の原料に用いられるようになると、その価格がたいへん高くなりました。農産物の中で最も利益の多い作物となっていました。

富士山麓の村々では、競ってミツマタの栽培をすすめ、たんぼにミツマタを植える人もいたそうです。

渡辺登三郎は、ミツマタが高く売れることに注目し、天子ヶ岳山麓の官林300町歩をかりて、大規模なミツマタ栽培をすすめました。

春には山一面にミツマタの花が咲き誇り、さぞかしきれいな景色だったでしょうね。



天子ヶ岳山麓のミツマタ園を想像した景色

ところが、全国的にミツマタをたくさんつくりすぎて価格が暴落し、白糸のミツマタ園は荒廃してしまいました。渡辺登三郎は、このままではいけない、なんとかしなくてはと考えていました。

渡辺登三郎は、ミツマタを原料にして、機械で紙を抄くことを思いつきました。そうすれば、ミツマタがたくさん使われ、ミツマタ園を立て直すことができるのではないかと考えました。

◇ことばの説明

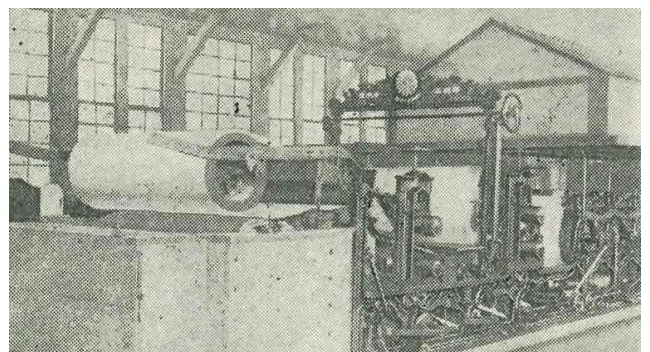
官林 … 国のものである 林

300町歩 … 1町歩は、一辺が100mの正方形の広さです。300町歩は、その300倍で、ほぼ縦1000m 横3000mの長方形の広さです。

ひみつ3

製紙の機械化

機械を使って紙をつくるようになったのは、明治5年ころからで、イギリス、アメリカやドイツから機械を輸入して始まりました。製紙の機械化とともに、消費される紙も和紙から洋紙へと変わっていきました。そのような変化の中で、渡辺登三郎は、和紙の原料であったミツマタを機械で抄き、生産コストを下げることで、ミツマタの消費拡大を考えたのでしょうか。和紙は、1枚1枚手漉きで、生産コストが高くつきますが、機械で抄くと大量に生産でき、価格が安くなります。



印刷局 国産第1号の抄紙機 (明治14年)

渡辺登三郎の考えは、はじめてのことで、まわりの人にはすぐに理解されませんでした。しかし、そのときの静岡県令(知事)の大迫真清は、渡辺登三郎の新しい挑戦を理解し、助成金を出しました。また、東京の製紙会社の社長であった渋沢栄一も協力してくれ、試験抄きを成功させました。

この紙は、宮内省の役人である山岡鉄舟のはからいで、すべて買い上げられ、赤坂仮皇居の壁紙に使われました。

この挑戦で自信をもった渡辺登三郎は、郷土に製紙工場をつくる夢を持ち、大迫真清に相談に行きました。

◇ことばの説明

「漉く」と「抄く」… 手漉きと機械抄きのように、人手による手作りの場合は「漉」、機械によるときは「抄」が一般的に使われます。

生産コスト … 一つのものをつくるお金。

ひみつ4

富士製紙工場の誕生

渡辺登三郎は、静岡県令の大迫真清の紹介で、水力利用による製紙を考えていた官僚出身の河瀬秀治や製紙に詳しい村田一郎と出会い、製紙工場を設立することになりました。

はじめは、富士郡原田村(現富士市原田)に富陽製紙という会社を計画しましたが、原料を木材パルプにすることになり、富士郡入山瀬村(現富士市入山瀬)に変更になりました。大きな水車を回してその力で木材をくだいて製紙の原料をつくりました。そのために水量のある潤井川沿いの場所が選ばれました。渡辺登三郎は、場所の選定をはじめ大きな役割を果たしました。富士製紙会社は、明治21年11月から着工し、明治23年1月4日に操業をはじめ、日本を代表する製紙会社になりました。



明治20年代の富士製紙会社

この工場で働く人が約500人、やがて、第2工場が小泉に、第3工場が源道寺に、さらに芝川にも四日市製紙工場が建設されました。大勢の人たちが働く場を得て、紙の町として栄えていく元になりました。

駿河半紙から始まった紙づくりの営みは、富士山麓の豊富な水の恵みを受け、多くの人々の努力によって、日本一の製紙の町をつくったといえます。

◇ことばの説明

木材パルプ… 木材などの植物原料を機械的または化学的に処理して繊維を取り出した状態のもの。

ひみつ5

ミツマタ栽培のなごり

富士製紙株式会社では、木材、ぼろ布、藁などを主な原料とし、ミツマタを原料にした紙はつくられませんでした。

故郷への思いをあきらめずにいた渡辺登三郎は、大正6年、白糸村の熊久保にミツマタを原料とした製紙工場をつくり、コピー紙、駿河半紙の生産を始めました。しかし、原料のミツマタは、富士山麓では白かび病の発生でほとんどなく、高知県から取り寄せていました。工場の収益は、期待するほどではなかったようで、しだいに廃れていきました。

ミツマタ栽培・和紙づくりのなごりは、昭和期の戦後まであったようです。半野区誌によると、「半野区の八幡宮の境内には、昔ミツマタを蒸かした大きな鉄釜が置かれていました。蒸かされ皮をむかれたミツマタの皮は、お札用として仲買人を通じて造幣局へ運ばれていました。」とあります。



半野区の八幡宮

今でも、天子ヶ岳山麓にミツマタが自生しているのは、昔、白糸がミツマタの栽培地、駿河半紙の生産地だったことを物語っています。

そして、渡辺登三郎がてがけたミツマタ園をはじめ白糸村村有林は、村民の共同作業によって植樹や手入れが行われ、現在の白糸財産区有林として引き継がれています。

◇ことばの説明

白糸村… 明治22年、富士郡原村、内野村、佐折村、半野村、狩宿村が合併して、白糸村になりました。そして、昭和33年3月に富士宮市と合併しました。

はじめて紙がつくられたのは、今から2100年から2200年前ころの中国だったと伝えられています。「後漢書」に、西暦105年に蔡倫という人が紙をつくり帝に献上したとあることから、紙の発明者とされています。

中国の紙づくりは、その後、数世紀後に朝鮮半島をへて、日本に伝わりました。7世紀の高句麗の僧の曇徴によってもたらされたといわれています。



蔡倫の功績をたたえる像 中国の湖南省

紙は、貴族や役人が記録をとるために用いられ、奈良時代から平安時代には、お経を紙に写す写経に多く使われました。平安時代には、都を流れる川の水を使って製紙を行う「紙屋院」と呼ばれる所で、専門に紙づくりが行われていました。

このころになると、たいへん質のよい紙が漉かれるようになっていました。やがて、各地で和紙づくりが発展しました。このように、日本で独自の発展をした製法の紙を「和紙」と呼びます。



かみこ ちゃばおり
紙子の茶羽織

江戸時代になると、生活のなかのあらゆるものに紙が利用され、商品となり大量に消費されました。今では使われなくなった紙の服もつくられ、紙子と呼ばれました。おもに、僧侶の服や雨合羽などに使われましたが、写真のような着物もつくられました。楮でつくられた和紙は、たいへんじょうぶだったのですね。

◇ 『第26号 駿河半紙のひみつ』は、次の資料をもとに作りました。

- 1 『白糸をめぐる郷土研究』 白糸村村議会編集委員会 / 藤本印刷所 1953
- 2 『日本産業史大系 5 中部地方編』 駿河半紙 若林淳之 / 東京大学出版会
- 3 『駿河24号』 みつまた発見に関する異見 鈴木富男 / 駿河郷土史研究会 1974
- 4 『富士宮市史 下巻』 富士宮市史編纂委員会 1986
- 5 『半野区誌』 富士宮市半野区 / マグナプロセス 2005
- 6 『和紙を漉こう』 監修 宮内正勝 / 株式会社リブリオ出版 2003
- 7 『郷土の発展に尽くした人々』 静岡県教育委員会 編集・発行 / 1981
- 8 『世界遺産になった和紙 1~4』 新日本出版社 編集・発行 / 2015
- 9 『製紙業の100年 紙の文化と産業』 王子製紙株式会社 1973
- 10 『近代製紙工業の先駆者、渡辺登三郎』 澤田政彦 2014